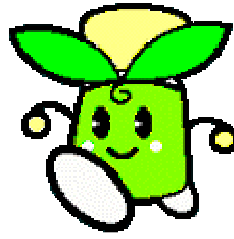


# 稚桜 (わかざくら)

～南中学校長室より～

平成 28 年度 NO. 12

平成 29 年 2 月 1 日



*Be Proud Of Us*

寒い日が続きます。インフルエンザ、風邪の季節です。うがい手洗いの励行、十分な睡眠と栄養等、健康管理をお願いします。特に、3年生は間もなく、県内私学・県外私学・特色選抜の入学試験に挑むこととなります。実力を発揮するためにも当日、万全の体調で挑めるように、ご家庭でも指導をお願いします。

## 阪神・淡路大震災から学ぶ(1月17日)

阪神、淡路大震災から 22 年がたちました。震災で亡くなられた方々や被災された方々、また、その後遺症と闘っておられる方々に、あらためて哀悼の意とお見舞いを申し上げます。

この日には、各クラスで、担任より、防災や命の大切さについて話をしました。

政府や行政の対応の遅れが批判された一方、学生を中心としたボランティア活動が活発化し、1月17日は「防災の日」と同時に「ボランティアの日」として制定されました。支え合い、助けあい、励まし合って生きることの大切さを多くの人が実感しました。

東海地震、南海地震、東南海地震の大地震が、いつ起こりか分からない状況の中で、私達は恐れているばかりでなく、それらに対抗できる「人のつながり」を日々の生活で強固にしていかなければならないと思います。

## 自立心を奪う「過保護」

自分の子供の事を心配するが故、行き過ぎた子育てをしてしまう事があります。子供の成長段階の中で、自分で考えて困難に立ち向かう事や、自分の意志で行動し責任をとる事などを経験していかななくてはなりません。その成長段階で、親が必要以上に口をはさんだり、親が決断し問題を回避したりすることは、結果的に子供の成長を阻害してしまう事につながります。心配になる気持ちもわかりますが、見守るということも必要になります。まず、自主性が育つように、子供自身で考えさせ、親がアドバイスをすることにより子ども自身で成長していきます。

「あぶないからだめ」

大切なのは大人が危険を取り除くことではなく、危険との向き合い方を教えることだと思います。

**親** → 「木の上に乗って見守る」のが「おや」です。

## 反面教師から学ぶ

人から学ぶ。その謙虚な心を持って、あらためて周囲の人間を見直してみると、全く学ぶに値しない人間など、実は一人もいないことがわかってくるはず。「会う人みなわが師匠」。これは、健康にも学歴にも恵まれなかった松下幸之助の口癖だったそうです。だれからも学ぶ謙虚さを忘れなければ、その人はそれだけでひとかどの人物になれるにちがいありません。かりに、相手が欠点だらけの嫌な人物であっても「ああなるまい」という反面教師になります。反面教師も立派な先生で、時には、それは「正」の先生よりもずっと有益なお手本となるのです。学ぶ気さえあれば、人は悪人や泥棒からも学ぶことができる柔軟な存在であるともいえます。一生に出会う「人」は限られています。運命の出会い。自らの幸福のために「会う人みなわが師匠」を忘れずに・・・子どもたちにも教えてあげたいと思います。



## 不寛容なクレーム

～「みんなが幸せになれるように、少し寛容な気持ちを持てば・・・」～

### 一部の意見か？全体の意見か？

#### 年越しに鳴り響く『除夜の鐘』

聞くと「一年が終わり、また新しい年が始まるんだなあ」と思われる。日本の風物詩です。しかし最近では、この除夜の鐘が「うるさい」との近隣住民の苦情を受け、昼間や夕方に鳴らすお寺が増えているのだとか。静岡県にある大澤寺（だいたくじ）もその一つ。大澤寺の web サイトには除夜の鐘が一時中止になり、再開したものの昼間に除夜の鐘をつくことになった経緯が記されています。『夜間衝く鐘の音に対する波津地区のどなたからのクレームの電話があったことから父の代で終了した除夜の鐘。それを昨年から時間を大幅に繰り上げて再開したというものです。』『除夜の鐘がうるさい」とのクレーム。日本の風物詩として楽しみにしている身としては信じられない気持ちですが、多くの方はどのように感じているのでしょうか。

#### 「餅つきは日本の伝統。できないのは残念だ」

都市近郊の JA 職員が嘆いた。この JA は約 6 年前、祭りで長年実施してきた餅つきをやめた。地域に親しまれてきたが、保健所から「食中毒の危険がある」としてやめるよう指導を受けたためだ。「衛生管理は重要だが、餅つきは収穫の喜びを分かち合う昔ながらの行事。消費者も喜んでいたので」と惜しむ。この地域の保健所によると、餅つきは食中毒の要因となる菌やウイルスが付きやすく、屋外で実施する場合は手洗いや器具洗浄が徹底できず、ウイルスのまん延を招きやすいとして「制限はやむを得ない」と話す。厚生労働省監視安全課によると、餅つきを原因とした食中毒発生件数の統計はないが、餅を原因にした食中毒は 2013 年が 4 件（1 件が桜餅）、14 年が桜餅で 1 件、15 年が 1 件発生。13 年のうち 1 件は「餅つき会」のイベントが原因と特定されている。同課によると餅つきは食品衛生法の営業許可は原則不要で、都道府県や政令指定都市、保健所を管轄する自治体が個別のルールを設けているという。

#### 「マンション内あいさつ禁止」は防犯になるのか？議論

新聞に投稿された「マンション内ではあいさつをしない」というルールが話題になっている。11 月 4 日付の神戸新聞に掲載されたのは、マンションの管理組合理事をしているという 56 歳男性による投書。「住民総会で、小学生の親御さんから提案がありました。『知らない人にあいさつされたら逃げるように教えているので、マンション内ではあいさつをしないように決めてください』。」という内容だ。ほかの住民たちも、「あいさつが返ってこないのが気分が悪かった。お互いにやめましょう」と賛同し、「あいさつ禁止」が決定してしまったのだとか。

#### 「シュールすぎる…」音楽をイヤホンで聴きながらの“無音盆踊り”に嘆きの声

音楽をイヤホンで聴きながら踊る「無音盆踊り」が話題となっている。愛知県東海市の大田町で、盆踊りの参加者が静寂の中で踊る「無音盆踊り」が行われている。2009 年から始まった「無音盆踊り」は今年で 6 回目。8 月 8 日と 9 日に開催された今年の「無音盆踊り」には約 400 人が参加した。イヤホンで聴きながら踊る。無音盆踊りでは、踊り手が携帯ラジオを持参。主催者側が FM トランスミッターで飛ばした音楽を受信し、イヤホンを使って聴きながら踊る。音楽が周囲に聞こえないので騒音対策になるし、踊りに没頭できるという効果もある。また、工夫すれば踊りの内側の輪と外側の輪で違う曲を流すこともできるし、会場から離れて少人数や一人で盆踊りをすることも可能だという。なぜ、このような一風変わった盆踊りが行われているのだろうか？無音盆踊りを行っている「ザ・おた・ジャンプフェスティバル」の大会長は次

のように語っている。本当は岐阜の『郡上（ぐじょう）おどり』のように夜中踊れる盆踊りが理想だが、周囲への配慮から騒音対策も必要。まちおこしも兼ねて、多くの人に参加できる新しい盆踊りの形を模索した。騒音対策などを考慮して、「無音」という新たな盆踊りを考え付いたという。全国で、祭りの音などを「騒音」として苦情がよせられる事態が相次いでいる。阿波踊りで有名な徳島県では、踊りの練習音について「うるさい」という苦情が県庁に寄せられた。同じく阿波踊りで有名な東京都の高円寺でも騒音対策として、ライブハウスや体育館の窓を閉めきって練習している。また、「ラジオ体操」への苦情が出る地域も増えており、東京都足立区のある公園では苦情を受けてラジオ体操の音量を4分の1に下げたという。

### 保育所と住民 子供の声は騒音なのか

匿名ブログをきっかけに待機児童の解消が重要課題となっている。その一方で、「子供の声がうるさい」など周辺住民からの反対で保育所の開設を断念する例が相次いでいる。毎日新聞の全国調査では、2012年度以降だけで開設を断念した事例が11件、開設が遅れたケースも15件あることが分かった。「静かな住環境を守りたい」という住民の気持ちはわかるが、未来を担う子供は社会の宝だ。次世代の人口が減少すると年金や介護など老後の暮らしを支える制度も危うくなる。なんとか折り合いをつけて、地域で子供を育てる環境を作りたい。千葉県市川市では4月に開設予定の保育所が住民らの反対で建設中止に追い込まれた。子供の声だけでなく、送迎の車による渋滞、交通事故のリスク、親たちのマナーにも批判は向けられる。多世代同居が普通だった時代と異なり、核家族で夫婦共働きが多くなった現在、一戸建てが多い住宅街では昼間、子供の声あまり聞かれなくなった。そうした地域に保育所を作ろうとすると、住民たちから反対されることがある。厚生労働省の15年調査では、子供の声を「騒音」と思う人が約35%に上った。地域活動に参加していない人ほど「騒音」と感じる割合が高い。家族や地域付き合いの変化が、子供の声を疎ましく思う人々の増加に影響しているのだ。保育所建設の計画段階から住民説明会を丁寧に行い、防音ガラスや壁の設置に取り組み、住民に納得してもらっている自治体もある。反対運動が起きている地域では、自治体の事前説明が不十分だとして住民らが不信を募らせるケースが目立つ。保育は、行政がサービス支給の決定や調整の権限を一手に握っていた「措置制度」から、利用者の意向を重視する制度へ転換した。利用者にとっては選択権が広がったが、その一方で行政の責任が後退し、調整能力も弱くなっているのではないか。子供を保育所に預けなければ働けない親と周辺住民の主張がぶつかり、当事者間での解決が難しいからこそ、利害調整をする行政の役割が重要なのだ。高齢世代が子供の声に不寛容だというわけではない。厚労省の調査では、むしろ年齢が高くなるほど子供の声を「騒音」と思わない割合が多い。反対運動も一部の人が声高に反対しているだけで、何となく引きずられて同調している人の方が多いと言われる。子供たちの声を「騒音」と決めつけて受け入れないことに心を痛めている人は多いはずなのだ。これからの時代を背負う子供たちである。優しく見守る地域社会を育てたい。

### マンションに児童相談所の計画 住民反発「なぜここに」

児童虐待の相談対応件数が多いのに、児童相談所（児相）が1カ所しかなかった大阪市が、北区のマンションに新しい児相をつくる計画を検討している。だが、マンション住民が計画に反対。市は児相の必要性を訴え、説明会を重ねているが、平行線のままだ。「児相の必要性はわかるが、ここにつくる必然性がわからない」「市は説明責任を果たしていない」住民らは9月14日、「住人が生活面で不安を抱える」と計画の見直しを求める陳情書を市議会に提出。署名はこれまでに全360世帯のうち184世帯から集まった。市の担当者は「現状では進められない。丁寧な説明を尽くしたい」と言う。